

# 駒ヶ根市の中学生 250 人の方言と方言意識

清水はるな

## 1. はじめに

本論では、2015 年 10 月に、駒ヶ根市の中学 2 年生 290 人を対象とした方言意識調査の結果と、その分析考察を述べていきたい。長野県駒ヶ根市の中学 2 年生が使用する方言と、方言を使用するときの意識について調査したものである。

ここでは、駒ヶ根市の方言的特徴を説明したのち、調査の概要をまず述べ、次に調査結果の中から、次の項目を選んで報告していく。

- (1) 俚言および気づかれにくい方言が、どの程度使用されているか。
- (2) それらを方言だと意識しているか、共通語だと意識しているか。
- (3) それらをよく使用しているのは、どのような年齢層の人々だと思うか。
- (4) 言語形式の使用率と方言・共通語意識の相関
- (5) 方言・共通語意識と使用年齢層意識の相関
- (6) 言語形式の使用率と使用年齢層意識の相関

## 2. 駒ヶ根市の方言的特徴

まず、駒ヶ根市の地理的位置を示す。駒ヶ根市は、長野県の南信地方に位置している。南信地方は、上伊那地方と下伊那地方に分かれるが、駒ヶ根市は上伊那地方の南部に位置する（図 1）。

長野県方言は、本州東部方言であるナヤシ方言（長野県・山梨県・静岡県方言）に属しており、長野県は、さらに奥信濃方言、北信方言、東信方言、中信方言、南信方言の 5 つの方言区画に分かれる（図 2）。駒ヶ根市は南信方言に属しており、本州西部方言的特徴が少なからず見られる（馬瀬良雄 1992）。

駒ヶ根市内には中学校が 2 校ある。赤穂中学校と東中学校である。生徒数は赤穂中学校が圧倒的に多く、第 2 学年については、前者 290 名、後者 66 名である。したがって、赤穂中学校の第 2 学年全員の調査結果を見れば、2015 年現在の駒ヶ根市の中学 2 年生の言語動向を、ほぼ把

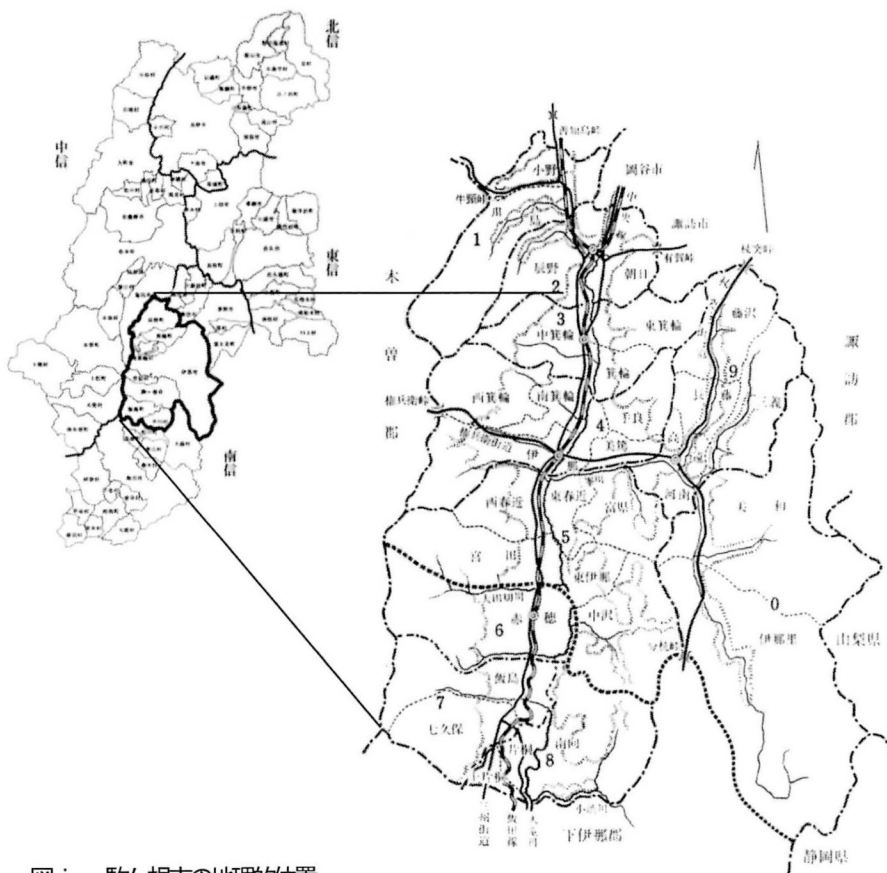


図 i 駒ヶ根市の地理的位置



図 ii 長野県の方言区画(馬瀬 1992:9) より

握できるといえよう。なお、第2学年を選んだのは、調査時期との関係で、授業を妨げないことに配慮したからである。

得られたデータから、回答不十分なデータのほか、言語経歴が不明な回答、および、駒ヶ根市の居住歴が5年未満の回答者の回答を除いた。その結果、最終的な分析対象者数は229人となった。これらは、すべて、駒ヶ根市の生え抜きである母方言話者である。調査は、担任の先生方に依頼し、各クラスごとに調査の記入をしてもらった。

赤穂中学校は、筆者の母校であり、筆者は18歳まで駒ヶ根市内で育成したため、内省や観察を生かしながら、調査対象形式を絞っていった。調査対象形式一覧を、次頁の表1に示す。

調査票では、表1に示した調査対象形式について、次の(1)から(3)の事柄を質問した。選択肢もあわせて示す。

- (1) この語を使用しますか。(どれか1つに○) [⇒以後、使用意識と呼ぶ]

使う／意味はわかる／聞いたことはある／知らない

- (2) この語は、方言ですか、共通語ですか。(どれか1つに○) [⇒方言・共通語意識]

方言／共通語／わからない

- (3) この語は、どの世代の人がよく使いますか。(2つ以上選択可) [⇒使用年齢層意識]

お年寄り世代／親世代／若者世代／誰でも使う／わからない

本論では、表1に示すように、調査対象29形式を以下のように分類した。

A類：共通語と形式が異なる【俚言】

(6形式)

B類：共通語と形式が似ていて、意味用法が異なる【気づかれにくい方言】

(8形式)

C類：共通語と形式が同一で、意味用法が異なる【気づかれにくい方言】

(11形式)

S類：共通語【共通語】

(4形式)

表 1 調査対象形式とその種類および意味

	種類	調査対象形式（下線）	意味
俚言	A類 共通語と形式が異なる	ずく	やる気。根気。活力。熱心さ。
		壁 <u>こう</u> つかる	寄りかかる。
		つま <u>い</u>	窮屈だ。きつい。
		昨日は走ら <u>なんだ</u>	～なかった(過去の打消し)。
		ほ <u>こり</u> まる <u>け</u> なる	～まみれ。
		先生ならもう帰った <u>に</u>	…よ。
気づかれにくい方言	B類 共通語と形式が異なっていて、意味用法が異なる	そ <u>っこ</u>	底。
		かばんの <u>まえ</u> でに置いた	前。前方。
		お <u>し</u> よる	折る。
		空き地に家がた <u>た</u> る	建つ。
		は <u>な</u> らか <u>す</u>	引き離す。遠ざける。
		お <u>も</u> しい	おもしろい。
		に <u>ぎ</u> やか <u>い</u>	にぎやかだ。
		あの人がそんなことやり <u>っ</u> こ	するはずが <u>ない</u> 。することは <u>ない</u> 。
	C類 共通語と形式が同一で、意味用法が異なる	<u>二</u> 年参 <u>り</u>	大晦日から深夜0時の年明けにかけて神社に参りに行くこと。
		<u>へ</u> らが痛い	舌。
		下の方にこず <u>む</u>	沈殿する。
		無事に友達といきあ <u>え</u> た	予定して人と会う。
		味噌汁濃 <u>い</u> から水(お湯)で <u>う</u> め <u>た</u>	水などを加えて温度や濃度を下げる。
		家の鍵を <u>か</u> う	鍵やかんぬきをかける。
		肩まで <u>し</u> ずんでよくあたたまった	お風呂につかる。
		ドアに指 <u>つ</u> めて痛い	ドアなどに指をはさむ。
		このリン <u>ご</u> を <u>ほ</u> けて <u>お</u> いしくない	古びて柔らかくなった状態。
		ハンカチ忘れたから持 <u>ち</u> に <u>行</u> っ	取りに行く。
		<u>て</u> くる	
		雨降ってきたから洗濯物 <u>よ</u> せ <u>た</u>	洗濯物を取り込む。
共通語	S類 共通語	<u>い</u> そが <u>し</u> い	
		昨日、買 <u>い</u> 物行ってきた <u>よ</u>	
		遊 <u>び</u> に <u>行</u> きた <u>が</u> る	
		次の角を <u>ま</u> がると見える	

### 3. 意識ごとの回答結果

#### 3.1 使用意識について

まず、使用意識について、各表現形式を「使う」と回答した割合（以下、使用率と呼ぶ）を図1に示す。

また、使用率について、種類別に最大・最小・平均を求め、表2および図2に示した。

この結果を見ると、方言A～C類については、いずれの種類においても最大と最小の差が大きく、よく使われる語と使われにくい語の2層に分かれた。

最大・最小の値について、方言A～C類で比較してみると、A類からC類に向かって使用率が高くなり、共通語S類の結果に近づくという傾向が見られた。

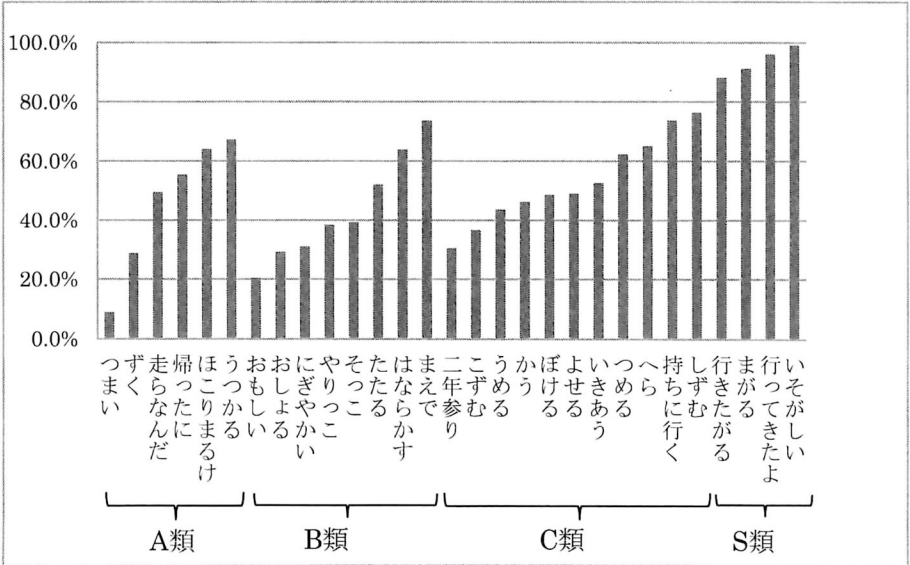


図1 種類別の使用率

表1 種類別の使用率の

最大・最小・平均

	最大	最小	平均
A類	67.2%	8.8%	45.6%
B類	73.7%	20.5%	43.5%
C類	76.4%	30.6%	53.2%
S類	99.1%	88.2%	93.7%
全体	99.1%	8.8%	54.6%

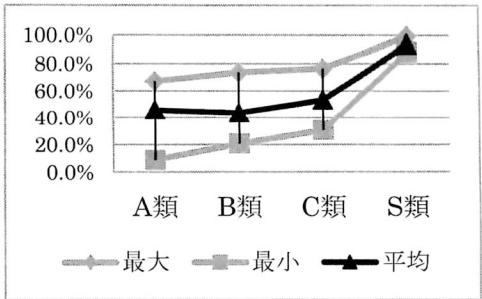


図2 種類別の使用率の最大・最小・平均

### 3.2 方言・共通語意識（方言だと思うか、共通語だと思うか）について

方言・共通語意識の結果は、図3に示した通りである。

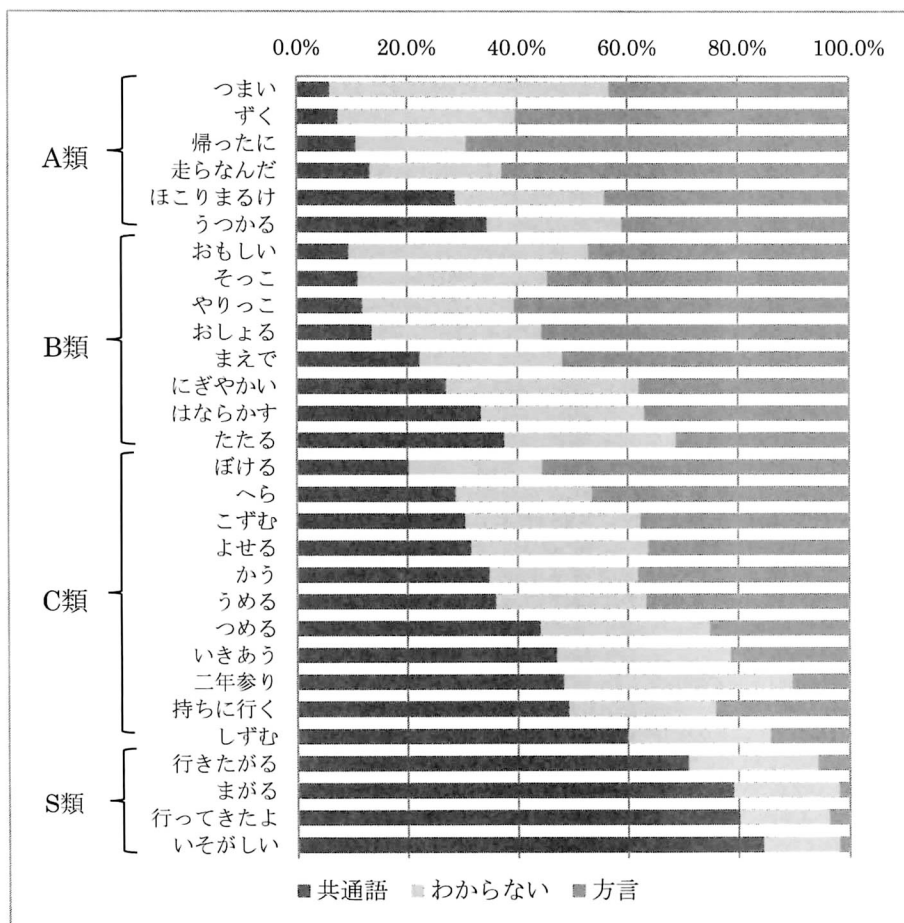


図3 種類別の方言・共通語意識

これについても共通語意識と方言意識それぞれについて、種類ごとに最大・最小・平均を求めた。

表3および図4に示した、種類ごとの共通語の最大・最小・平均を見てみると、C類はA・B類に比べて最大・最小・平均のすべての値が高く、共通語であるS類に、より近い結果となっている。A類とB類は同程度の値ではあるものの、B類の値がやや高い。よって、A類からC類に向かって、共通語だと認識されやすくなるといえる。

表3 種類別の共通語意識の

最大・最少・平均

	最大	最小	平均
A類	34.5%	6.0%	16.8%
B類	37.6%	9.4%	20.8%
C類	60.0%	20.2%	39.1%
S類	84.5%	70.9%	78.7%
全体	84.5%	6.0%	34.9%

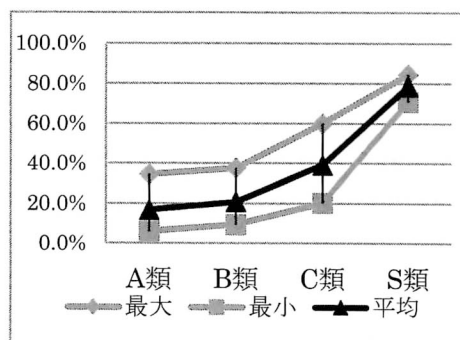


図4 種類別の共通語意識の

最大・最少・平均

また、種類ごとの方言意識の最大・最小・平均の結果を、表4および図5に示す。

この結果を見ると、方言意識に関しては、最大・最小・平均のいずれも、A類からC類に向かって値が下がり、共通語のS類に近づくという傾向が見られた。よって、方言意識についてもA類からC類に向かって、共通語に近い結果が得られたといえる。

表4 種類別の共通語意識の

最大・最少・平均

	最大	最小	平均
A類	69.3%	41.0%	53.5%
B類	60.5%	31.2%	46.9%
C類	55.5%	10.2%	31.4%
S類	5.6%	1.9%	3.3%
全体	69.3%	1.9%	36.4%

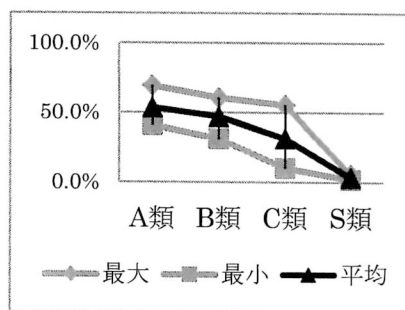


図5 種類別の方言意識の

最大・最少・平均

共通語意識と方言意識をまとめて考察すると、A類、B類、C類の順に共通語意識は高まり、方言意識は低くなる傾向が見られた。この意識傾向はA・B類とC類との間で顕著に現れていた。

### 3.3 使用年齢層意識（どの年齢層の人がよく使うか）について

使用年齢層意識については、「誰でも使う」と「お年寄り世代が使う」の回答に注目して結果を述べていく。

まず、「誰でも使う」の回答率（以下、誰でも率と呼ぶ）について結果を見る。各表現形式の

誰でも率を、図6に示した。

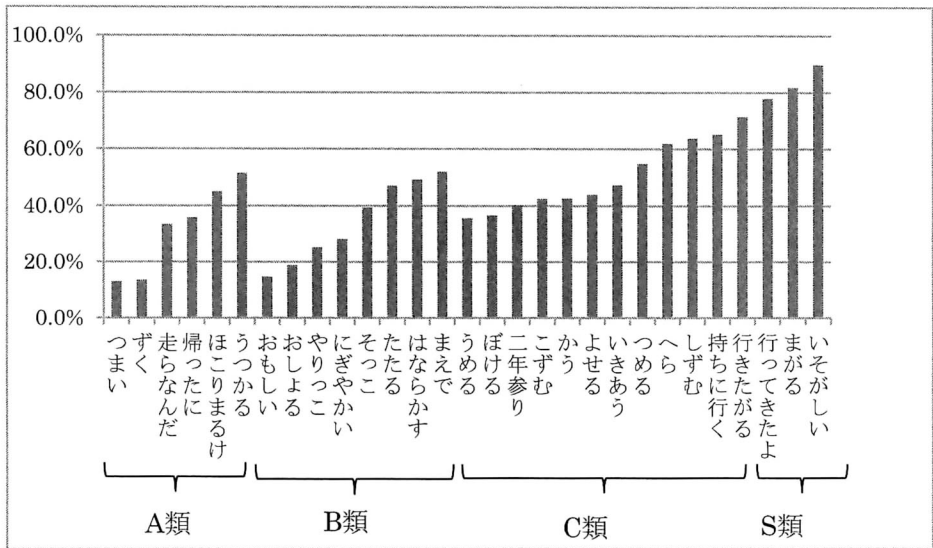


図6 誰でも使うと思う人の割合

誰でも率について、種類ごとの最大・最小・平均を表5および図7に示した。この結果を見ると、A・B類の最大・最小・平均の値はほぼ同じで、誰でも率が低く、誰でも使うとは思われにくい傾向が見られる。C類に関しては、最大・最小・平均のいずれの値も上昇し、相対的に共通語S類に近い結果が得られている。

表5 種類別の誰でも率の

最大・最小・平均			
	最大	最小	平均
A類	51.6%	13.0%	32.1%
B類	52.1%	14.7%	34.4%
C類	65.2%	35.6%	48.7%
S類	89.9%	71.6%	80.3%
全体	89.9%	13.0%	45.6%

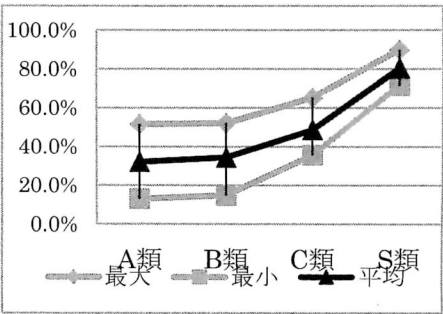


図7 種類別の誰でも率の

最大・最小・平均

次に、「お年寄り世代が使う」という回答率（以下、お年寄り率と呼ぶ）について、各表現形式の結果を図8に示す。



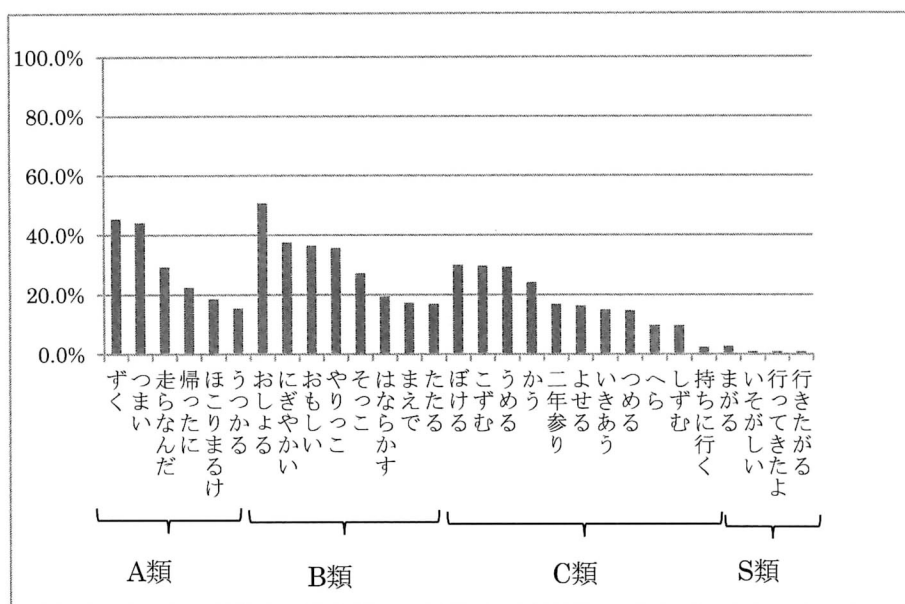


図8 お年寄り世代が使うと思う人の割合

お年寄り率について、種類ごとの最大・最小・平均を求めたものを、表6および図9に示す。

この結果を見ると、A・B類が最もお年寄りが使うと思われやすく、C類は値が小さくなり、共通語S類の結果に近づく傾向が見られた。

表6 種類別のお年寄り率の

	最大・最小・平均		
	最大	最小	平均
A類	45.4%	15.4%	29.2%
B類	50.8%	16.9%	30.1%
C類	30.0%	8.6%	18.0%
S類	2.7%	0.9%	1.4%
全体	50.8%	0.9%	21.4%

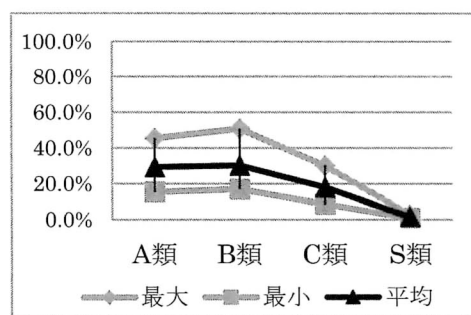


図9 種類別のお年寄り率の

最大・最小・平均

誰でも率とお年寄り率の結果を合わせて考察すると、A・B類は、誰でも使うとは思われにくく、お年寄りがよく使うと思われやすい傾向があった。C類は、A・B類に比べると共通語S類

に近く、お年寄りのみではなく誰でも使うと思われやすいことがわかった。

### 3.4 A類・B類/C類/S類という使用意識の傾向性について

調査対象形式を A 類：俚言、B 類：共通語と形式が似ていて、意味用法が異なる気づかれにくい方言、C 類：共通語と形式が同一で、意味用法が異なる気づかれにくい方言、S 類：共通語に分類し、使用意識、方言・共通語意識、使用年齢層意識について、調査結果をまとめた。

それを見ると、いずれの意識においても、C 類は、A・B 類に比べて、より共通語 S 類に近い結果であった。

## 4. 各意識の相関

### 4.1 使用意識と方言・共通語意識の相関

各表現形式の使用率と方言・共通語意識の相関を図に示すと、使用率と共通語意識は図 10、使用率と方言意識は図 11 のようになる。

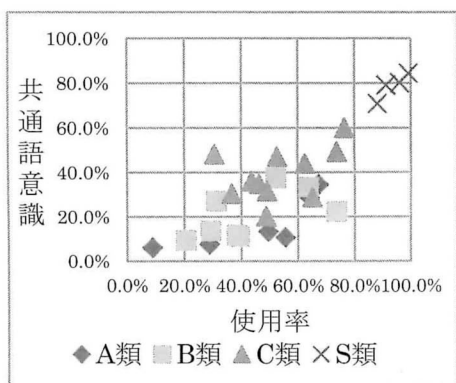


図 10 使用率と共通語意識の相関

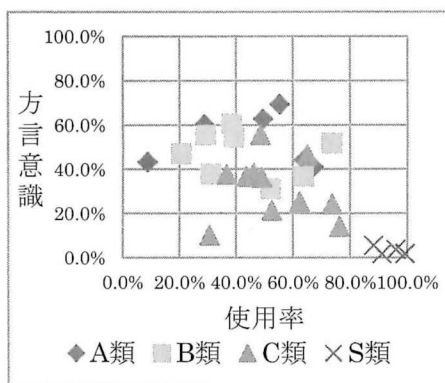


図 11 使用率と方言意識の相関

使用率と共通語意識について、図 10 を見ると、使用率が高くなるにつれて共通語だという意識も強まる傾向が強くなるという傾向がうかがえる。

方言意識については、図 11 を見ると、使用率が高くなるにつれて方言だという意識が弱くなっている。共通語とは反対の意識になるといえるが、共通語意識に比べるとその相関は弱い。これは、方言意識が強くても使用率の高い形式、また、方言意識が弱くても使用率が低い形式が見られるためである。

この結果から、共通語だと思えば使用されやすいが、方言だからといって使用しないわけではないということがわかる。つまり、中学生の母方言話者にとって、その表現が共通語であるかどうかは、その形式を使用するか否かにかかわるといえるが、方言であるかどうかはあまり関係がないのだといえる。

## 4.2 共通語意識と使用者年齢意識の相関

次に、共通語意識と使用年齢層の意識について相関を見る。図 12 には共通語意識と誰でも率、図 13 には共通語意識とお年寄り率の相関を示した図を示す。

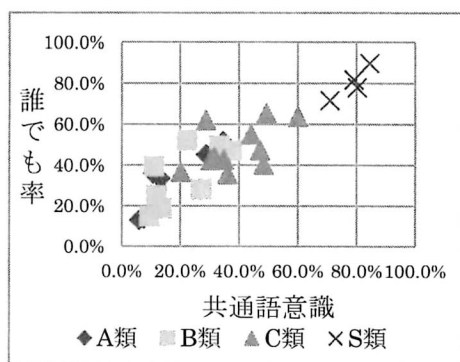


図 12 共通語意識と誰でも率との相関

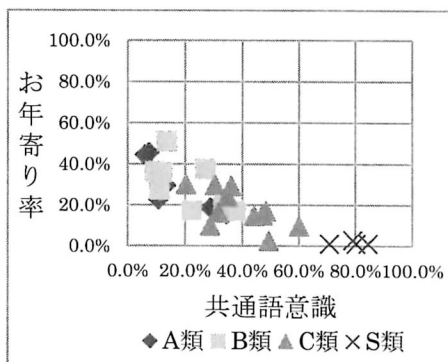


図 13 共通語意識とお年寄り率との相関

図 12 および図 13 を見ると、共通語意識が高くなると誰でも率も高くなり、逆にお年寄り率は下がるという傾向が見られる。このことから、誰でも使っていると思われる形式は、共通語だという感じられる傾向が強いが、逆に、お年寄りがよく使っていると感じられると、その形式は共通語だと思われにくくなるということがいえる。

## 4.3 使用意識と使用年齢層意識の相関

最後に、使用率と使用年齢層意識について相関を見る。図 14 には使用率と誰でも率、図 15 には使用率とお年寄り率の散布図を示した。図 14 および図 15 を見ると、使用率が高い形式ほど、誰でも使っていると感じられる割合が高く、逆に、お年寄りのみが使っていると感じられる割合は下がる傾向が強く見られる。先に挙げた方言・共通語意識よりも、使用年齢層の意識の方が、その形式の使用率と、より強い相関が見られることが指摘できる。

このことから、その形式が、方言 (A 類)、気づかれにくい方言 (B・C 類)、共通語 (S 類) を問わず、誰でも使っていると意識される形式は使用されやすくなり、逆に、同年代の人は使わ

この結果から、共通語だと思えば使用されやすいが、方言だからといって使用しないわけではないということがわかる。つまり、中学生の母方言話者にとって、その表現が共通語であるかどうかは、その形式を使用するか否かにかかわるといえるが、方言であるかどうかはあまり関係がないのだといえる。

## 4.2 共通語意識と使用者年齢意識の相関

次に、共通語意識と使用年齢層の意識について相関を見る。図 12 には共通語意識と誰でも率、図 13 には共通語意識とお年寄り率の相関を示した図を示す。

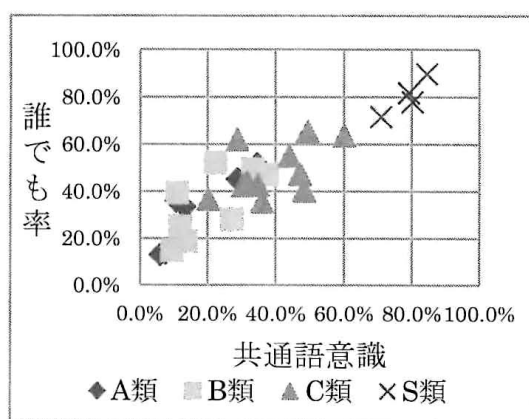


図 12 共通語意識と誰でも率との相関

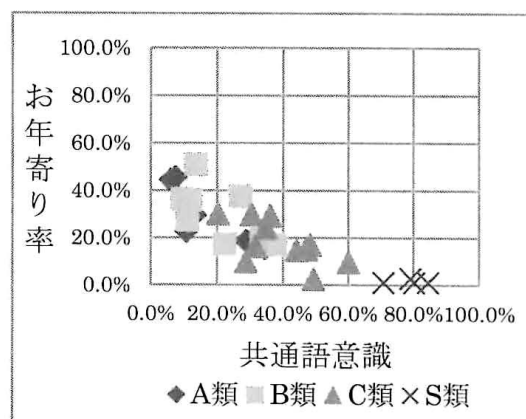


図 13 共通語意識とお年寄り率との相関

図 12 および図 13 を見ると、共通語意識が高くなると誰でも率も高くなり、逆にお年寄り率は下がるという傾向が見られる。このことから、誰でも使っていると思われる形式は、共通語だという感じられる傾向が強いが、逆に、お年寄りがよく使っていると感じられると、その形式は共通語だと思われにくくなるということがいえる。

## 4.3 使用意識と使用年齢層意識の相関

最後に、使用率と使用年齢層意識について相関を見る。図 14 には使用率と誰でも率、図 15 には使用率とお年寄り率の散布図を示した。図 14 および図 15 を見ると、使用率が高い形式ほど、誰でも使っていると感じられる割合が高く、逆に、お年寄りのみが使っていると感じられる割合は下がる傾向が強く見られる。先に挙げた方言・共通語意識よりも、使用年齢層の意識の方が、その形式の使用率と、より強い相関が見られることが指摘できる。

このことから、その形式が、方言 (A 類)、気づかれにくい方言 (B・C 類)、共通語 (S 類) を問わず、誰でも使っていると意識される形式は使用されやすくなり、逆に、同年代の人は使わ

ずお年寄りのみを使うと意識されると、その形式は使用されにくくなるということがいえるのである。

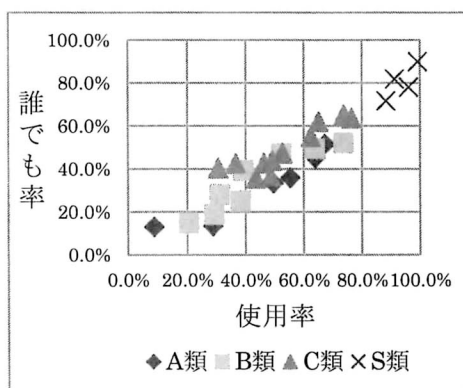


図 14 使用率と誰でも率との相関

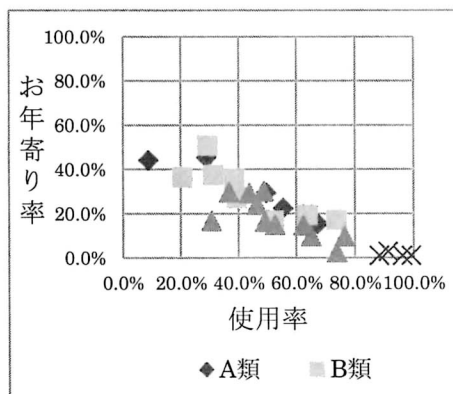


図 15 使用率とお年寄り率との相関

#### 4.4 誰でも使用していると感じられると、出自を問わず使用率が高い

以上、29 の調査対象形式について、使用率、共通語意識、使用年齢層意識が、それぞれ、どのように相関しているのかを見てきた。

次の項目間の相関について、強い順に並べると以下のものであった。

使用率×使用年齢層意識>共通語意識×使用年齢層意識>使用率×方言・共通語意識

各意識同士の相関の中で、最も強い相関が見られたのが、使用率と使用年齢層意識であった。駒ヶ根市の中学2年生にとっては、その形式が年齢層を問わず誰にでも使用されていると感じられれば、その形式を自分も使用するという関係が強く見られたのである。それが俚言であっても、気づかれにくい方言であっても、共通語であってもそうであった。

上記の相関は、使用率と、その形式の出自に対する意識（それが俚言であるか、気づかれにくい方言であるか、共通語形であるかという判断）との相関よりも強い傾向性があった。それは、方言であるA類（俚言）、B・C類（気づかれにくい方言）の中にも、誰にでも使用されていると感じられているものとそうではないもの（お年寄りが使うと認識されているもの）とが見られたということでもある。

## 5. まとめ

長野県駒ヶ根市立赤穂中学校の第2学年290人全員に対して行った、2015年10月の調査結果（分析対象数は229人の生え抜き話者）を示し、分析考察してきた。

本論でとりあげた調査対象 29 形式の種類は、以下の通りである。

A 類：共通語と形式が異なる【俚言】(6 形式)

B 類：共通語と形式が似ていて、意味用法が異なる【気づかれにくい方言】(8 形式)

C 類：共通語と形式が同一で、意味用法が異なる【気づかれにくい方言】  
(11 形式)

S 類：共通語【共通語】(4 形式)

これらの調査対象形式について、1) 使用意識、2) 方言・共通語意識、3) 使用年齢層意識を尋ねた結果、次のことが明らかになった。

まず、俚言 A 類、気づかれにくい方言 B・C 類のいずれの類にも、よく使用される形式とそうではない形式が含まれていた。類ごとに比較すると、A・B 類より、C 類の使用率の平均値が相対的に高く、より共通語 S 類の使用率平均値 (78.7%) に近づいていた。

また、それらを方言だと意識しているか、共通語だと意識しているかについても、A・B 類と C 類で、傾向が分かれた。C 類は、共通語だと意識される率が、A・B 類より相対的に高かった。(A・B 類は、C 類より、それを俚言だと意識している人が多かった。)

さらに、それらをよく使用しているのがどのような年齢層の人だと思うかについても、A・B 類より C 類の方が、どの年齢層でも使用される (=誰でも使用する) と感じられる割合が高かった。A・B 類は、お年寄り世代がよく使う形式だと感じる人が多く、C 類については、お年寄り世代がよく使うとする人は少なかった (=C 類は、どの世代の人も使うと感じる人が多かった)。

以上までを総括すると、使用率、方言・共通語意識、使用年齢層意識については、いずれも、A・B 類が似た傾向を示し、C 類が共通語 S 類の値に近づいていることが指摘できた。

次に、使用意識、方言・共通語意識、使用年齢層意識について相関を分析し、次のことを明らかにした。

まず、使用率と方言・共通語意識の関係については、使用率が高くなると、共通語意識は強まり、逆に、方言意識は弱くなる傾向が見られた。ただし、方言意識の強い形式にも使用率が高い形式が見られたことから、方言だからといって使用しないというわけではないといえる。

次に、共通語意識と使用年齢層意識の関係については、共通語意識が強い形式は、誰でも使うという意識も強いという結果が出た。逆に、共通語意識が低くなると、誰でも使うという意識が薄れ、お年寄りが使うという意識が強くなった。

最後に、使用率と使用年齢層意識の関係を見たところ、最も強い相関関係にあることがわか

った。使用する形式は、誰もが使うと意識される（＝使用しない形式は、お年寄りが使うと認識されている）という傾向が強く見られた。

以上を総括すると、駒ヶ根市の中学2年生の母方言話者は、同年代の人が誰でも使っていると思う形式であれば、それが俚言、気づかれにくい方言、共通語の別を問わず使用しているのだといえる。

**付記** 調査に快くご協力くださいました、駒ヶ根市立赤穂中学 藤澤義富 校長先生、国語科の3名の先生方、また、第2学年の生徒の皆様に、この場を借りて、厚く御礼を申し上げます。本研究は、平成27（2015）年度に信州大学人文学部に提出した卒業論文の一部に加筆したものです。指導教員である信州大学人文学部教授 沖 裕子先生には、厚いご指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表します。また、投稿に先立ち、第90回長野・言語文化研究会で口頭発表をいたしました。席上、有益なご助言をいただいたことに、御礼申し上げます。

#### 参考文献

- 沖裕子（1992）「気づかれにくい方言」『月刊言語』21-11 大修館書店
- 沖裕子（1995）『「気づかれにくい方言」の隆盛と俚言使用の二相化』『言語』第24巻第13号、大修館書店
- 沖裕子（1999）「気がつきにくい方言」『日本語学』臨時増刊号、第18巻第13号、明治書院
- 佐藤武義・前田富祺編（2014）『日本語大事典』朝倉書店
- 馬瀬良雄（1992）『長野県史 方言編 全1巻』長野県史刊行会
- 馬瀬良雄（1980）『長野県 上伊那誌 第5巻 民俗篇下』上伊那誌刊行会
- 馬瀬良雄編（2010）『長野県方言辞典』信濃毎日新聞社
- 馬瀬良雄編（2013）『長野県方言辞典〔特別版〕』信濃毎日新聞社

（しみず はるな・2016年3月 信州大学人文学部卒業生）